

ストロップたばこ

——子どもの健康を守る——



<下>

喫煙者を含めた大人が子どもをたばこの害から守るために何ができるか。

赤く燃えるたばこの先端から立ち上る煙。フィルターを通さないこの副流煙には、喫煙者が吸い込む主流煙の五十二倍のニトロソアミン(発がん物質)が含まれている。本人だけでなく、煙にさらされる子どもなど周囲に悪影響がある。

まつだ小児科医院(倉吉市新町三丁目)の院長で、くらし喫煙問題研究会代表世話人の松田隆さんは「たばこの害を子どもに伝え、理解してもらうことが大切」と訴える。

周囲への悪影響



ガラス瓶に入ったタールを見る松田さん

松田さんは「これを見てくたさい」とガラス瓶を机に置いて、中に入っている黒いへ

とろろの物体に「人間カーIEは二・八倍、一酸化炭素に匹敵する抵抗力減衰すること問題。二十本のたばこを一年間吸うと七倍、がんや動脈硬化、低酸素血症などさまざまな病気の引き金となる。」

たばこの煙は二百種類以上の有害な化学物質を含んでいられる。その中で三大有害物質とく、中耳炎にかかりやすくなる。副流煙が主流煙の三・四倍、ニコチン吸う姿を見て、たばこに対する

松田さんは「まず親がたばこを吸わないことが一番」とした上で、「どうしても吸う場合、家庭では同じ部屋で吸わないこと」と訴える。屋外で吸う場合も、服や吐息に成分が残るので、目安として三十分は室内に入らないことが必要だという。

また、子どもがたばこに手を出さないようにするため、たばこの害について説明できるだけの知識を身に付けることも求められる。たばこを吸い始める時期とされる小学五年生ごろから中学一年生ごろまでに教えるのが効果があると指摘する。

松田さんは「たばこは皮膚の老化も早め、骨粗しょう症の原因にもなる。自分と家族の健康を考えれば、たばこは『百害あって一利なし』です」と話している。

(この企画は本社・植田紀子、高取正人、山本圭介が担当しました)

煙の中に有害物質200種超